

『不寛容論』

2021年01月18日

国際基督教大学の森本あんり教授が『不寛容論 アメリカが生んだ「共存」の哲学』を上梓している。現代は、不寛容が横行し、争い、戦争の絶えることがない時代であり、誰もが寛容をもって「共存」できる社会、世界を望んでいる。時代に呼びかける興味深い著作であった。寛容は、ヴォルテールの「わたしはあなたの意見に反対だが、あなたがそれを主張する権利は命をかけて守る」という言葉に根拠があると見なされている。しかし、この言葉を生きることは至難で、破られているというのが現実である。

まず、「キリスト教やイスラム教などの『一神教』は不寛容だ」、それに対し「日本は『多神教』だから寛容だ」と言われることが多い。この説の発端には「砂漠由来の一神教」と「農耕由来の多神教」が対比されている。日本の宗教学者たちもこの説を継承し、欧米の対テロ戦争が、この説を一層拡散した。森本氏は、堀江宗正氏の「世界価値観調査」のデータを用いて、日本と他国との比較結果を紹介している。指標に選ばれたのは中国、インド、アメリカ、ブラジル、パキスタンで、一神教、多神教、無宗教など、多様な宗教事情を抱えた国々である。日本は、「他宗教の信者を信頼する」人の割合は下から二番目、「他宗教の信者も道徳的」と考える人の割合は最低、「他宗教の信者と隣人になりたくない」が一番多く、「移民・外国人労働者と隣人になりたくない」はインドに次いで多い。堀江氏は、「一神教＝不寛容」「多神教＝寛容」という説は事実と正反対であると結論づけている。寛容は「一神教か多神教か」ではなく、「多様か単一か」である。多様であるということは、一神教、多神教、無宗教があって、それらが混ざり合い、接触と移動を繰り返し、互いの存在を身近に感じ、社会の寛容度を上げる。森本氏は、日本人は寛容でも不寛容でもなく、「無寛容」ではないかと言う。無寛容は時として不寛容へと変貌する。宗教迫害、戦時中の「非国民」、ヘイトスピーチ、コロナ禍での「自粛警察」など、例はいくつも上げられる。

本書は、副題に「アメリカが生んだ『共存』の哲学」とつけられているように、ロジャー・ウィリアムス（1603 頃～1683）の思想と生涯を紹介することがメインテーマである。私は彼について全く知らなかったが、彼は17世紀、新天地を目指してアメリカに渡ったピューリタンで、その中で驚くべき寛容を主張している。彼の思想は4点である。1. 先住民の土地を、イギリス王の特許状によって得たことを悔い改めるべきである。2. 宣誓は宗教的な行為だから、それを町全体の住民に強要することは違法である。3. 腐敗した英国教会とかかわりをもつことは、すべて違法である。4. 市民政府の権力は、身体や財産といった人間の外的状況にしか及ばない。彼はピューリタンの独善を戒め、キリスト教（カトリック、クエーカー）、イスラム教、無宗教も認め、共存を図った。そして、アメリカ先住民の権利を侵すことのないように説いた。近代社会が勝ち取った信教の自由、政教分離など、民主主義の原則を先取りし、これらに基づくタウン作りに専念した。現代からみれば、当然の主張だが、当時においては、反対勢力が多く、壮絶な闘いを展開している。そして、不遇な最期を遂げている。アメリカは今なお、人種差別に苦しみ続け、トランプ大統領によって民主主義は危うい状況にあるが、諸々の国からの移民を受け入れてきたアメリカの寛容さはウィリアムスの思想に負うところが多いことを知らされた。彼は燃えるようなピューリタンであったが、森本氏は、その熱心さが寛容の原理を引き出したのではないかと分析している。自分にとって信仰はかけがえのない尊いものだから、他者の信仰も大切であると認める。言葉を変えて言えば、確固たるアイデンティティを持つ者は意見や立場の違う他者と共存し、寛容になるということではないか。